

中学生のキャリア・アダプタビリティに関する研究

－学級適応感との関連から－

四 宮 康 亮

1. 目的

本研究では、児童期から成人期以降までの生涯にわたるキャリア発達を評価する指標として使用できることが期待されるキャリア・アダプタビリティから、中学生のキャリア・アダプタビリティ尺度の開発および時間的展望の関連から検討することを目的とする。またキャリア・アダプタビリティ尺度と学校適応感との関連についても検討する。

2. 方法

2009年7月にA市の公立中学校4校の1684名（男子831名、女子841名、不明12名）を対象とし、新たに開発した「キャリア・アダプタビリティ尺度」と「Q-U（中学生用）」の「学級生活満足度尺度」と「学校生活意欲尺度」を用いた。

3. 結果と考察

因子分析を行ったところ、「将来設計・展望力」「進学設計・展望力」「変化対応力」「援助要請力」「責任力」「時間解決」の6因子構造であることが見出された。次に、キャリア・アダプタビリティ尺度の学年差を求めたところ、「変化対応力」以外の各下位尺度は学年が上がるにつれ、能力が高くなっていくことが示され、キャリア・アダプタビリティは中学生から発達し、学年が上がるにつれてその能力が高くなることが示唆された。次に、キャリア・アダプタビリティ尺度の性差を求めたところ、男女間で学校生活を送る上での役割が違っており、特に「変化対応力」「援助要請力」「時間解決」に対しては男女それぞれに必要な時期に必要な能力を身につけさせるよう援助しなければならないことが示唆された。これらの結果は、学級生活満足度尺度と学校生活意欲尺度との関連からもうかがうことができた。

また、キャリア・アダプタビリティ尺度と学級生活満足度尺度の4群間の差について検討したところ、キャリア・アダプタビリティの発達には、本人がいじめに関連するような侵害を受けているかどうかよりも、他者から承認を受けているかどうかのほうが、大きくかかわっていることが示された。

現在、キャリア・アダプタビリティという概念そのものが新しい概念であるため、その概念や定義は統一されてはいない。そのため、その概念の研究をさらに発展させることが今後の課題である。